

第1章 わたしたちがめざすもの

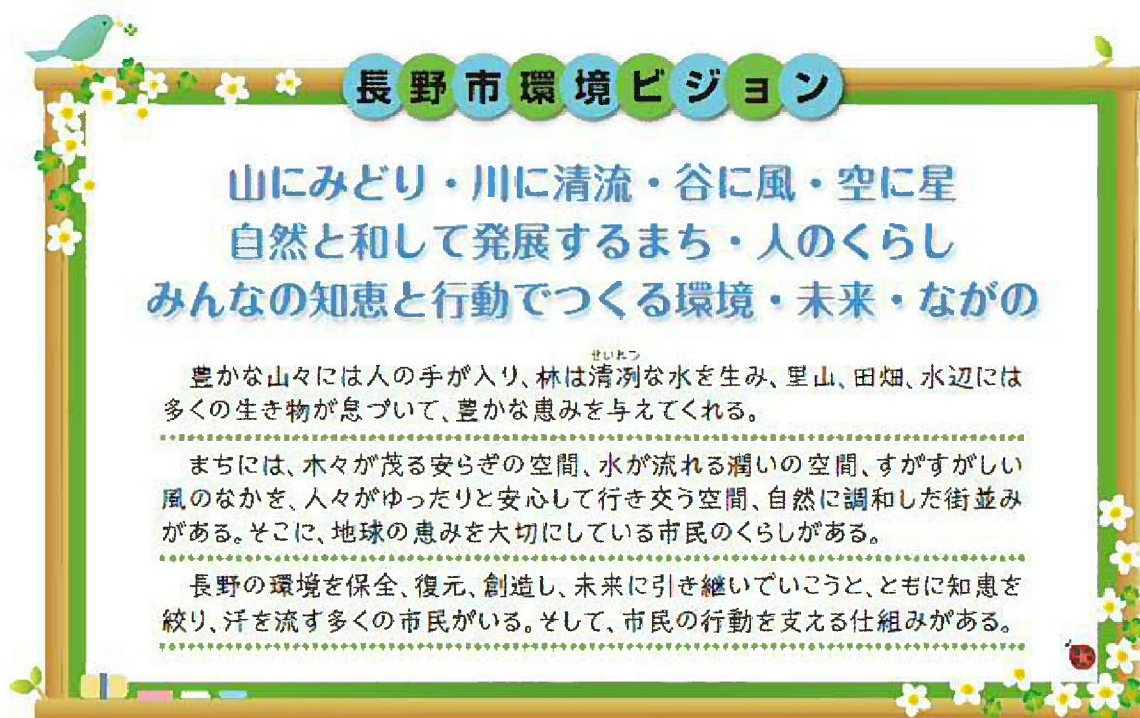
～長野市の環境ビジョン～

長野市の将来の姿がどのような姿であればいいのでしょうか？

市では、2017（平成29）年3月、目指すまちの将来像の実現に向け、新たな行政運営の指針として「第五次長野市総合計画」（本市の最上位計画）を策定しました。この計画の環境分野で策定されている第二次長野市環境基本計画後期計画やアジェンダ21ながのなどは、長野市総合計画を補完するものとして位置付けられております。そのアジェンダ21ながのでは、市の目指すまちの将来像や環境の視点でその姿を考え、「長野市の環境ビジョン」として以下の姿を提案しています。

このビジョンは、長野市に住んでいる人のほか、長野市で働く人、長野市を訪れる人や事業者などに、環境関連の活動の方向性を示すものとして多くの方の参加・協力を得て、実現を目指します。

1 長野市の環境ビジョン



こんなほっとするまち「ながの」を私たちは目指します。

ここでは、自然と人間の共存を軸に長野市の理想の環境像が描かれています。

豊かな自然は、私たちの生活に様々な恵みをもたらしています。この環境を将来に渡って引き継いでいくこと、自然と調和した社会生活やまちづくりを推進すること、そして環境への配慮が永続性を持つよう今後も英知を集結することが、長野市に暮らしている私たち一人一人に求められています。

2 環境ビジョンを実現するために

「ながの環境パートナーシップ会議」では、環境ビジョンの実現を目指し、複数のプロジェクトを実行しています。

プロジェクトは、個々に独立して取り組みを実施しますが、環境ビジョンの実現を目指す体系の中では、「自然」、「生活」、「未来」という3つのテーマの下にそれぞれが位置付けられています。

現在、「ながの環境パートナーシップ会議」では、多くのプロジェクトが実行されていますが、今後、市民意識の高まりや科学技術の進化など時代の変化とともに、実行すべき新たなプロジェクトも発生してくるものと思われます。

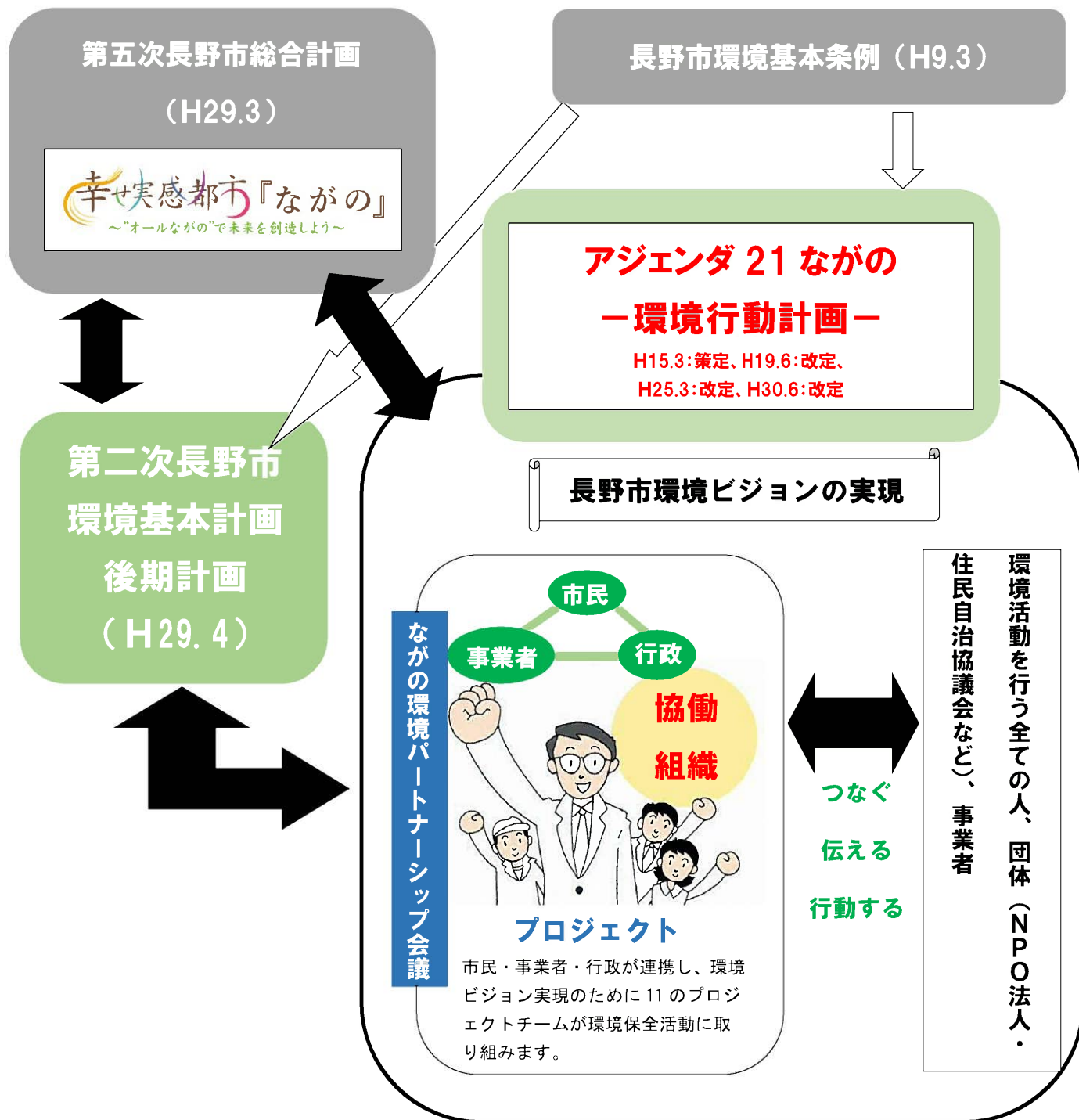
そこで、「ながの環境パートナーシップ会議」では、自由な発想で、楽しみながら取り組めるプロジェクトの提案を積極的に受け入れていくこととします。

また、一緒にプロジェクトに取り組んでいただける方も幅広く受け入れるとともに、同様の活動に取り組んでおられる方々の支援にも積極的に取り組んでいきます。

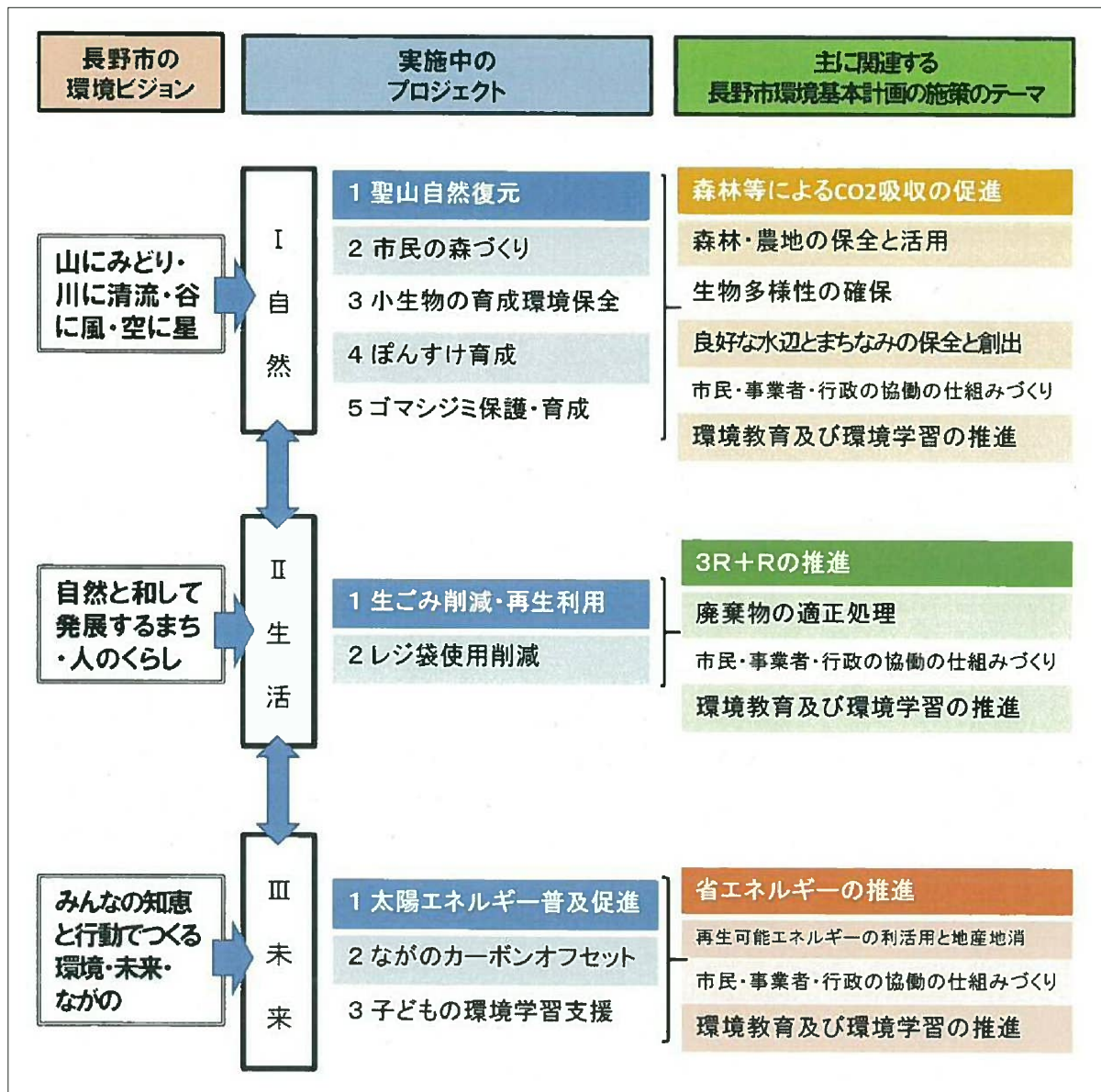
このように「ながの環境パートナーシップ会議」では、環境問題に関わる人や団体を結び（つなぐ）、情報を共有（伝える）し、共に活動（行動する）する役割を担うことにより、環境保全に向けたネットワークを築き、地球規模の環境問題へと視野を

広げながら、地域から地球規模に広がる環境保全活動を推進し、環境ビジョンの実現を目指していきます。

アジェンダ 21 ながのー環境行動計画ー2018 概念図



ビジョン・プロジェクト体系



ながの環境パートナーシップ会議では、上記プロジェクトを実施しています。

長野市環境ビジョンの実現を目指していくためには、新規プロジェクトを立ち上げ、プロジェクト活動の活性化を図っていく必要があります。

3 ながの環境パートナーシップ会議の4年間(平成 25 年度～28 年度)の活動と今後の展望

これまでの4年間の活動を振り返り、今までの成果と今後の展望をまとめました。

(1)ながの環境パートナーシップ会議の4年間の活動

①全体の総括について

現在、個人、事業者、団体における環境を大切にしようという意識の高まりから環境保全活動を経済活動の制約要因ではなく成長要因の一つと捉え、地球温暖化対策などの環境保全活動と経済活動の活性化のバランスを取りながら、環境問題に取り組む社会へと変化してきました。

このような社会全体における環境に対する意識の変化は、個人、事業者、団体による環境問題に関する意識啓発、率先した活動の成果であり、「ながの環境パートナーシップ会議」も、その一翼を担うことができたのではないかと考えています。

このような状況のなか、平成 27 年度に、理事会及び合同会議においてながの環境パートナーシップ会議と各プロジェクトの抱える課題を改めて確認し、全体的な高齢化に伴う活動力の低下等が指摘されたため、新規会員を確保し、活動力の確保並びに活性化を図り、継続可能な基盤の整備にも着手しました。

また、長野市負担金の減額や NP0 法人みどりの市民の事務局業務一部委託の撤退により、継続する活動を展開するための体制づくりが急務となったため、最初の試みとして市民の森づくりプロジェクトが民間団体の助成金申請を行い、2016（平成 28）年度分の助成金決定を受けたのを皮切りに、2017（平成 29）年度分の申請では、市民の森づくりプロジェクト、生ごみの削減・再生利用プロジェクト、小生物の育成環境保全プロジェクトの3チームが申請し活動資金を確保しました。併せて、協働による活動基盤の増強と事業者の参画を促

進するため、「プロジェクトサポーター制度」を創設し、現在、4事業者がサポーターとなって、直接プロジェクトを支援いただける体制を確立しました。

ながの環境パートナーシップ会議では、これまでレジ袋削減、生ごみ削減、市民の森づくりなど多くのプロジェクトにおいて、市民・事業者・行政が協働で問題の解決に向けて取り組みを実行することにより、成果を上げてくることができました。

15年前に私たちが提案した、市民・事業者・行政の協働（パートナーシップ）により環境問題の解決に向けて取り組んでいくという理念は、社会の変化を捉え問題の解決に向けて取り組んでいく方法としては、先駆的なものであり、これまでの成果が有効性を証明しています。

ながの環境パートナーシップ会議では、今後も引き続き、市民・事業者・行政のそれぞれが役割を分担しつつ、対等の立場での協働により、環境問題の解決に向けて取り組んでいきます。

②各プロジェクトの活動等について

各プロジェクトは、私たちが目指す環境ビジョンの実現に向けて、プロジェクトごとに目的とする「理想の街」を掲げて環境保全活動に取り組んできました。

また、シンボル事業の開催や各種団体等の事業を支援しました。

実行中のプロジェクト	
I-1	聖山自然復元プロジェクト
I-2	市民の森づくりプロジェクト
I-3	小生物の育成環境保全プロジェクト
I-4	ぼんすけ育成プロジェクト
I-5	ゴマシジミ保護・育成プロジェクト
II-1	生ごみ削減・再生利用プロジェクト
II-2	レジ袋使用削減プロジェクト
III-1	太陽エネルギー普及促進プロジェクト
III-2	ながのカーボンオフセットプロジェクト
III-3	子どもの環境学習支援プロジェクト
シンボル事業	
IV-1	ながの環境団体大集合
主な各種団体事業の支援	
V-1	ライトダウンキャンペーン
V-2	ゴミゼロ運動
V-3	アレチウリ駆除
V-4	水環境全国一斉調査
V-5	信州大学 地域環境演習
V-6	山の日ウォーキング
V-7	フードドライブ・子ども応援ドライブ

I-1 聖山自然復元プロジェクト

理想の街

平成21(2009)年度末をもって閉鎖となった大岡聖山パノラマスキー場の跡地を地域の環境に適合した植生に復元し、伝統的土地利用を考慮しながらCO₂吸収源の拡大とボランティアによるネットワークが構築されているまち

1 「理想の街」に向けて成果のあったもの（具体的な活動実績など）

スキー客減少により、聖山パノラマスキー場が閉鎖となり今後の跡地利用について、当プロジェクトが長野市に受け入れられ、平成22(2010)年から「生物多様性の確保」の取り組みを始めた。

(1) 植物調査の活用

スキー場跡地第一ゲレンデで植物の調査を行い、スズラン・コウリンカ・ヤナギラン・クガイソウなど草原に特有な植物種の分布を確認した。

この植物種の生育箇所に関する情報は、スキー場跡地を管理する長野市観光振興課に提供し、スキー場跡地管理の資料として活用している。

(2) 小学校の活動支援

毎年春と秋、大岡小学校「みどりの少年団」に参加し、活動を支援することにより児童の樹木や草花への関心が高まってきた。

(3) 苗木づくりと管理

平成23(2011)年はブナの成り年に当たり、翌年春に発芽した実生をビニールポットに鉢上げすることに成功し、ブナの苗木づくりの第一歩を踏み出した。

平成28(2016)年は信州大学工学部の学生が活動に参加し、草原を維持するための侵入樹木の伐除を一部区画で行うことができた。

2 実現できなかったこと

- (1) 草原生態系を維持するために「火入れ」を計画したが、実施に当たり関係者などの理解が得られず実施できなかった。現時点では「草刈り」及び侵入樹木の伐除で対応していくが、「火入れ」の単位面積を縮小するなど少人数で管理できる面積で関係者との調整を行っていきたい。
- (2) 「植生調査」や「出現種調査」ができていない。今後のスキー場跡地の具体的活動に当たり重要な資料となるので、植物相のみならず昆虫相や鳥類相など生物相全般にわたる調査を早急に実施したい。

3 課題

- (1) 平成24(2012)年度は、信州大学の学生が参加する関係で活動日を毎月第2土曜日と定めて定例的に行っているが、地元メンバーとの日程調整が図れず地域に根ざした活動となっていない。
- (2) 大岡小学校「みどりの少年団」の秋の活動では、樹木の種子を拾い集めてもらっているが、地元メンバーとの協議ができていないので種まきや水やりなど事後のフォローができていない。



聖山パノラマスキー場の概要

長野市大岡に位置し、旧更級郡大岡村が「聖ヶ岡スキー場」として昭和41(1966)年に開設し10haに6コースを備える。スキー人口の低迷等により平成21(2009)年度末をもって閉鎖した。

I-2 市民の森づくりプロジェクト

理想の街

四方を山に囲まれた長野市には、手入れされた里山がありそこには多様な動植物が暮らす豊かな森がある。人々はこの里山を利用し、楽しみ、未来につなげる自然の大切さについて学ぶことができるまち

1 「理想の街」に向けて成果のあったもの（具体的な活動実績など）

(1) 市民の森づくり

ア ボブスレー・リュージュパークの森の整備が進み、明るさを取り戻した森になってきた。また、市民がゆっくり散策のできる遊歩道の設置ができた。

イ 「市民の森」という概念を多くの市民に持ってもらうことができた。

ウ さまざまなイベントを実施し多くの市民に参加していただけた。

エ 林業講座などは 300名近い受講生を輩出でき、より安全な整備活動が広まった。

2 実現できなかったこと

(1) 第2、第3の「市民の森」構想が進んでいない。

(2) 「市民の森」の維持管理に地元との協力体制が進みつつあるが、まだまだボブスレー・リュージュパークの森林部分の整備活動に地元との関わり合いは希薄である。

(3) 「市民の森」にまつわる多くの可能性を引き出したり、活用したりできていない（カルチャー教室やサークル活動等）。

3 課題

(1) 「ボブスレー・リュージュパークの森の整備」に力を注いだため、森の整備が進み、整備事業にある程度の結果が見えてきたため、会員のモチベーションの維持が難しくなっている。

- (2) 他団体との交流や、もっと多くの人材との接点が少ない。
- (3) 地元の人材育成につながっていない。
- (5) 事業者との連携が進んでいない。
- (6) 積極的に活動する会員が増えない。

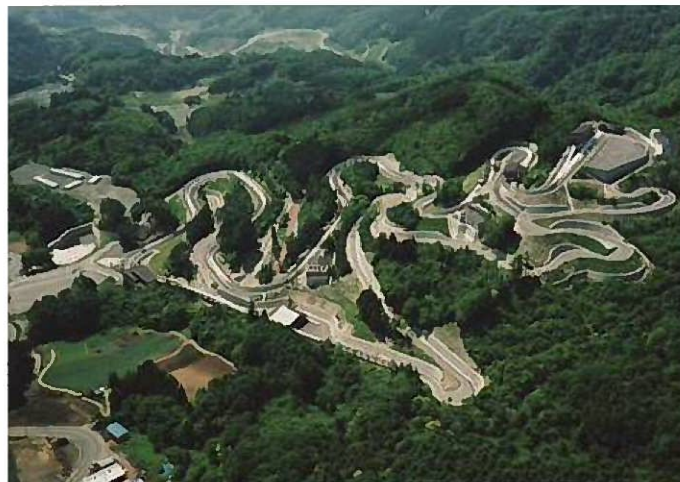
4 今後の展望

- (1) 第2、第3の「市民の森」構想の展開のための情報収集と構想実現に向かったの方法の検討
- (2) 多くの人材や、他団体との交流の中からより広いニーズと可能性の抽出を図る必要性
- (3) 森林整備にとらわれずに、広い視野でプロジェクトの運営を考える。
- (4) 森林の利活用についての可能性を探るとともに、社会のニーズにあった活動の検討をしていく。
- (5) 「市民の森」の維持管理に於ける地元との協力体制の構築

ボブスレー・リュージュパーク「市民の森」の紹介

平成10(1998)年に開催された長野冬季オリンピックでは「自然との共存」をテーマの一つに、ボブスレー・リュージュが開催された。「市民の森」は競技施設の周辺のスギやカラマツの人工林と広葉樹の山を市民有志で整備し、遊歩道を設置した森である。

スパイラルの森の面積約18ha、そのうちの約 4.5hを整備
遊歩道整備 総延長 約 1200 メートル



「市民の森」づくりの活動



遊歩道整備

I-3 小生物の育成環境保全プロジェクト

理想の街

身近な自然環境を守り後世に残すため、里山の小生物（オオムラサキ・メダカ・クワガタ・カブトムシ）など生育しエドヒガン・ヤマモモが咲く豊かな自然環境の保全を目指すとともにオオムラサキ以外の小生物（ジャコウアゲハ・キアゲハ・アサギマダラ等）の生息環境を作る。また、松代城を中心に1,000本桜作戦を推進しカトリック館をしのぐ松代全体を「マツノハエドヒガン」で覆い尽くす環境を目指す。

1 「理想の街」に向けて成果のあったもの（具体的な活動実績など）

- (1) オオムラサキを通じ環境課題が見えてきた。次世代を担う子供たちとの学習の中で環境とは「どのようなものか」を考えていくことができた。
- (2) 1,000本桜作戦では、現在1,100本を育苗している。今後継続して接ぎ木苗及び実生苗を植栽していくことになった。
- (3) 地区住民の理解を得て、松代地区住民自治協議会と協議しながら事業を推進することができた。

2 実現できなかったこと

オオムラサキの発生が以前より少なく原因を探っている。

3 今後の展望

- (1) オオムラサキが過去のように飛び交う場所となるよう、対策として環境保全活動の継続及び飼育舎の設置を検討していく。
- (2) 1,000本桜作戦を具体的に推進するため関係機関と話を詰めて行く。

(3) 本格的に桜の植栽を開始する。具体的には、各学校の卒業記念樹として現在ソメイヨシノ桜がテングス病で瀕死の状態の桜が多いことから各学校の要望を受け、植樹を展開していく。



I-4 ぽんすけ育成プロジェクト

理想の街

里山に生息する絶滅危惧種の多くは、市街地の開発された平野部に生息していた身近な生き物であった。つまり、開発によって生息場所を追われ、里山にかろうじて生き残っているといえる。過疎の進行した里山で絶滅危惧種の保全の問題を解決することは難しい。ぽんすけ（シナイモツゴ）をシンボルとして、里山の役割と現状を市街地住民にも知ってもらい、里山と市街地の市民が保全目標を共有できる街にしたい。

1 「理想の街」に向けて成果のあったもの（具体的な活動実績など）

- (1) 市民（地区内外）の皆さんを対象としたシナイモツゴの観察会を開催した。
- (2) 一人でも多くの方に活動を知ってもらうため、ぽんすけをデザインしたオリジナルTシャツ、バッチ、ステッカー、シールを作成し販売した。
- (3) 冬期間は、所属会員の自己研鑽を積むため、講演会や勉強会を開催した。
- (4) 自分たちチームの活動を全国に発信するため、ウェブページを開設した。また、フェイスブックなどSNSも開始した。
- (5) ぽんすけの住むため池の維持管理活動（抽水植物の除去、草刈など）を実施した。
- (6) ぽんすけの名を活用した農産物のブランド化をより一層推進するため、本チーム自ら稲作とリンゴの栽培を実施し、収穫後、販売した。
- (7) 本チームの活動拠点である「ぽんすけ小屋」を設置した。

2 実現できなかったこと

- (1) 信里地区住民への周知不足のためか、本活動に同地区住民の参加が少ない。
- (2) 地元の子供たちに自然観察会へ多く参加してもらいたかった。

3 今後の展望

- (1) 本格的に地区内に約 400 ある、ため池調査（ぼんすけ生息調査）を実施する。
- (2) 本チーム内に今後農業部（仮称）を立ち上げ、里山・水系維持のため、稲作や林檎の栽培を継続していく。
- (3) 自然観察会は、所属会員も楽しめるとともに自己研鑽となるため、最低でも年 2 回は開催していく。
- (4) 耕作放棄地の田んぼを活用したビオトープ化を検討していく。



I-5 ゴマシジミ保護・育成プロジェクト

理想の街

「元気なふるさと浅川を創生する」を目標に、浅川地区での地域資源の見直しと地域住民の意識の高揚を図り、地域活動への参画意欲を高めるため、浅川地区まちづくり計画を策定し、現在、各種事業を展開している。その事業の一環として地区内に生息が確認されている県指定希少種の蝶「ゴマシジミ」の保護・育成活動を地域住民と協働で実施し、「ふるさとの魅力を自然の豊かさで体験できる環境整備」の推進を図っていく。

1 「理想の街」に向けて成果のあったもの（具体的な活動実績など）

- (1) ゴマシジミが県の指定希少野生動植物に指定されたこと及びその特徴的な生態について地域住民と共有化を図るため、専門家等による講習会及び学習会を実施した。
- (2) 小学生や園児にゴマシジミの生態系を知って貰うとともに、保護・保全活動の継承を図ることを目的として、紙芝居の作成及び紙芝居の上演を行った。
- (3) 2017（平成 29）年秋、地域の浅川小学校（5・6年生徒）に協力要請し、採取した種を基に育苗と霊園内への植栽を実施した。
- (4) 植栽したワレモコウの保護及び採取の防止を図るため、囲い杭を購入し霊園内のワレモコウ植栽・生殖区域に打ち込むとともに看板を制作・設置した。
- (5) ゴマシジミの捕獲マニアへの啓発活動の一環として看板を作成し捕獲禁止を促すとともに園内の保護啓発パトロールを実施した。
- (6) ゴマシジミの生態等について更なる解明に努めるため、専門家（日本鱗翅学会及び信州大学の植物専門家等）による勉強会を実施するとともに県及び市との連携協力による情報収集のための各種調査を実施した。

2 実現できなかったこと（課題）

- (1) 生息地が開発公社敷地内の為、同社職員等の理解ある協力が継続的に得られるよう地域をあげて要請していきたい。
- (2) 生息共存であるといわれる「シワクシケアリ」が発見できなかった。今後関係機関と連絡を取り合い課題としたい。

3 今後の展望

- (1) 地区内のボランティア活動募集が順調に推移し更なる発展に期待している。
- (2) 紙芝居による活動が小学校において児童の活性化利用に発展しつつある。



Ⅱ－１ 生ごみ削減・再生利用プロジェクト

理想の街

- 1 市民一人一人が、地球環境をより良い形で後生に伝えるため、家庭系及び事業系のゴミの削減・再生利用に努め、ＣＯ２の排出量が以前と比べ大幅に減っているまち
- 2 地域ごとで多くの市民が、生ごみの減量化・再資源化について取り組み、有効活用しているまち
- 3 生ごみを可燃ゴミに出さず、全てリサイクルされ可燃ゴミが減少し、生命の循環を大切にしているまち

１ 「理想の街」に向けて成果のあったもの（具体的な活動実績など）

- (1) 「長野市一般廃棄物処理基本計画」にある生ごみの自家処理を、市民に広く普及するため、生ごみの削減・再生利用キャンペーンによる次のような啓発活動や各種講座を開催した。

- ①平成16(2004)年度から「生ごみフォーラム」を3回行い、次の講座を開催し、延べ300人を超える参加者があり、生ごみの有効活用の具体性を示せた。

ア 生ごみの少ない調理を提案「エコクッキング」、「箱膳のすすめ」

イ 生ごみの堆肥化とその利用「エコガーデン」、後に市の事業「生ごみ堆肥でガーデニング講座」に発展(2009年～)

- ②小・中学生による「生ごみ削減ポスター」を公募

ア 239点の作品が集まり優秀作品を表彰し、原画を展示、(市役所・公民館・デパート・駅など)多くの市民の目にとまり絶賛を得た。平成20年(2008)

イ 優秀賞 2 作品を4,000枚印刷し、要望のあった住民自治協議会の環境部会に配り、ごみステーション等住宅地に近い場所に貼ることができた。また、ごみ収集車（パッカー車）のボディにもペイントされ街中を走っている。

ウ これらの事業に係る経費28万円は、全て協賛事業者（株式会社本久・宝資源開発株式会社・信濃理化学工業株式会社・信濃楽農会）の協賛金で賄った。

(2) 家庭でできる生ごみ処理を多くの市民に理解し実践してもらうため、次のような取り組みをしている。（2010年～）

①「生ごみ堆肥化キャラバン隊」を組織して地域に出向き、住民自治協議会と連携し、各地域での定着を目指している。そのため、生ごみの削減・再生利用の方法（水切り・コンポスト・段ボール堆肥化等）を通じて、啓発活動や各種講座の開催をしている。

ア 芹田地区

「ボカシ作りと生ごみ堆肥化っばい運動」につなげる活動の支援をし、地域での広がりを促している。

イ 安茂里地区

「生ごみ堆肥化講座」を延べ14回開催し、310人を超える参加者があったものの、生ごみ削減の実績に結びついているかの検証が必要である。

ウ 若槻地区

「生ごみ堆肥化講座」9回、「生ごみ堆肥を使った土作り講座」3回「生ごみを出さないお料理教室」1回を実施し好評を得ている。

② 信州産生ごみ堆肥化基材(ビタピー5)の開発をして、実証実験を継続した結果、次のように改善できた。

ア 使いやすくする（燐炭を入れることで匂いを減らし、水分調整で安定発酵）。